

2019年1月 冬の経済教室 in 札幌の記録

- 1 日時：2019年1月26日（土）13：00～17：00
- 2 会場：キャリアバンク職業訓練校教室
- 3 主な内容

- ・関係者を入れて27名参加。
- ・司会を山下豊先生（札幌市立簾舞中学校校長）が担当。篠原総一経済教育ネットワーク代表の挨拶のあと、次の三つの講演、授業提案があった。

<鍋島講演>「新テスト問題を視点に授業改善を考える」

- ・鍋島史一氏（教育実践研究オフィスF代表）は資料をもとに以下のような話をされた。
- ・今回の試行テスト（第2回）は、「問題あり」の問題もあるが、「思考のプロセスを問う」問題など正解は何かを問う問題ではない問題も多く、意欲的に作成されている。

- ・その例は、資料にも載せたが、「政治・経済」第3問の間8（統計の読み方や意味のリード文）、第2問の間7（排出権取引を巡る探究型活動を内容とする問題）、第4問の間7（SDGsをめぐるデータの読み方の組み合わせ問題）、「現代社会」第6問の間1（探究活動に際しての資料さがし）である。

- ・特に、注目したいのは各設問の正答率である。先生方には上記の問題の正答率を予想してほしい。正答率を予想して現実の正答率と比較することで、生徒の理解度の問題点、問題そのものの特質や問題点が浮かび上がる。ここから日々の授業改善が見えてくるはずである。

- ・例えば、単純な問題にもかかわらず、正答率が低い問題があったとすると、それは、生徒の慣れ不足という面だけではなく、なぜその種の問題に慣れていないのか、授業者側の責任があるのかどうかなど、その理由を考えてゆくことで授業改善のヒントがで



- てくる。

また、資料のp5に示したような極端に正答率が

低い問題に関しても、問題そのものが問題なのか、それともそれを教えていないからなのか、吟味をすることで授業改善のヒントが得られる。

- ・ではそこから何を改善してゆくべきか。
- ・第一は、教科書をしっかり読ませることである。

しっかり読ませるとは、教科書を読む目的意識を刺激して、読んで理解する力を補わせることで達成できる。それは、講義を聞かせるより読ませた方が、理解が早いからであり、教科書を一読して分からない箇所があっても、読み返せば理解に関してはOKとなるからである。

なぜなら、人の話を聞いているときは巻き戻しができないが、読み返すことで理解ができるからである。先生が教科書の内容を説明するなど、生徒の肩代わりをしては、読解力は身につかない。

また、読んで理解したことは、言語化させることが必要である。副教材やプリントを読ませたら、そこで理解したことを生徒自身の言葉で言わせることが必要である。また、正誤判定の根拠なども、なぜそれが間違いなのかを生徒同士が検討しあうなど、言語化させることが必要である。

- ・第二は、作問技術上避けられない問題の対応と指導に留意することである。
- なかには、ディシプリン（規律）の理解がなくても正解できる問題がある。例えば前回の「現代

社会」の出題であるが、「大売り出し」→「物価が上昇した？」という文章についての吟味などは、論理的な不整合に気づけば、正解の「あたり」が付く問題である。

- ・その種の問題だけに注目して、怪しい受験テクニックに生徒が流されないようにしたい。「設問に正解できることと、正しく理解すること」とは、異なるからである。

- ・第三は、問いをたてる力を生徒に養うことである。

それには、授業者が、着眼点に気づかせる問いを実践場面に何度も入れ込むことである。

- ・そのためには、教科書の該当部分を行き来させる実践場面で、教科書や教材を用いて、角度を変えて問うてゆく重ね塗りが求められる。また、試行テストの内容すべてをカバーするのは困難だからであり、教科どうしや科目間などでの、カリキュラムマネジメントが求められる。

- ・そのほかに、生徒が志望する学部に合わせて、試行テストの問題を与えることも有効だ。その際には、単元を往復しながら、多角的に学ばせつつ、教科書に落とし込むことは大切な仕上げとなる。

- ・教科書を使う場合には、教科書を「深めさせる」のか、「広げるのか」は、目の前の生徒のニーズに合わせて設定することが必要である。その実践場面で生徒に与える問いの事例としては、「～はどういうこと（意味、制度）か」や「～は本当にそうか」という問いかけをしながら、生徒に迫ることが必要になる。

- ・いずれにしても、今回の「現代社会」は総文字数1万8,000字を50分で読み、解くことが求められている。1分あたりにすると300字である。論理的に、かつスピーディに読む力の育成が求められる。

- ・それができないから、第1回目の「現代社会」の需要供給曲線のシフト問題のように、日本語の論理的理解ができれば、内容を吟味しなくとも単純な4択問題であるような問題が、正答率16%という惨憺たる数字がでてきてしまう。

- ・試行テストから浮かび上がる、現在の授業の問題点、求められる指導法などを先生自らが発見するためにも、ぜひ先生たちが試行テスト問題をダウンロードして実際に解いていただければと思う。

<補足と質疑>

▼新井先生によるコメント

- ・2回目は改良されている。かなり意気込んで作っている。これをもとに高等学校の教育も変えていきたいという強い思いが感じられる。既に中学校までと、大学でも授業は変わってきている。

- ・テストで要求しているのは読解力である。そしてディシプリンが必要。読解力については、生徒は弱いところがある。国語では読解力と言っているが、社会科でいう読解力とはドッキングしていない。読み方を教えていない。逆に言うと、少しトレーニングすればできるようになる。

- ・試行問題のなかには、こんなに易しいのがなぜできないのかという問題もある。一方、予想外にできる問題もある。鍋島先生が指摘するように、具体的に読ませながら、教科書の記述の後ろ、背景まで考えられるような授業をしなければならぬ。そのためには、テストが要求している読解力は何かを私たち自身が分析する必要がある。

- ・「現代社会」の問題にある高校生新聞の問題は、設定が実態とのギャップを感じた。ディシプリンを知っていることで逆に解けない問題もある。ロールズの正義論を知っていると、選択肢が分からない。下手にディシプリンを知っていることによって、要求にこたえられない問題も出ている。

・問題の分析。レジュメ 5 ページ目の正答率が低かった問題。全部悪問だと思う。選択肢が悪いもの、ラッセルの空欄には複数あてはまる。3つめのものは知識を問う問題。4つめは判例を読ませて解かせる問題。論理的に考えれば解けるが。細かすぎるデータを分析できる生徒はいない。読解力は必要だが、本当に生徒にとって必要な読解力なのかということは検討する必要がある。中には、現代社会の第1問の3番目のように良問もある。最後の探究学習の中で、判別させる問題。授業の中で取り入れたい。活用はできる。

・いろいろ批判をしても、新テストは与件として考えざるを得ない。何が本質なのか我々がフィルターにかけて、メッセージを大学入試センターに送った方がよい。どういう意見が出てくるのか気になっていながら作っている。

▼篠原先生のコメント

・文科省が作問の側から各設問のねらいとメッセージが出ている。問題ごとに何を求めているのかを分析する必要がある。(昨年12/27付けで出ている。)

・問題を創る文科省の方も試行錯誤しながら作っている。もう一回試行テストがある。もっと改良されるはず。ここがおかしい、というようなメッセージを送ってほしい。

・新井先生が悪問といわれた国と地方の役割をデータから読み取る問題は、読み取れるように教えてないし、読み取れるように教科書の記述がなされていないのではないかな。だから正答率が低い。

<奥田提案>『未来をひらくアリとキリギリスの社会科教育』

・自己紹介から始まった。

・昨年3月まで中学校の教師をしていた大阪狭山市の紹介である。狭山池など、地域にはたくさんの教材づくりのヒントがあることを紹介してゆく。それだけでなく、地域の活動に関わってきた成果も紹介してくれた。

・実際に地域を歩いて作った教材の例として、回転寿司屋さん、非常勤で勤め始めた武庫川女子大のある兵庫県西宮のネタ（高速道路下の道路）、避難所の風景の変化（段ボールの区切り、ベッドなど）をあげられた。

・次は、ワークショップである。

・最初はアイスブレイクで、2人一組で隣の人と共通していることが何かを見つけるワークである。これは多様性を発見するものでもある。そのヒントとして、1958年に刊行された児童文学の『さかさ町』が紹介された。

・そこから、働くことを考え始める。

課題は100万円持っているとして、10の仕事に関して、いくら払ってほしいか（『さかさ町』が前提となっている）を考えるワークである。各自が記入をしたあと、その答えを検討する。レジュメの資料は次に、アリとキリギリスの話に進み、さらに、社会保障への広がるのであるが、今回は、時間の関係で、そこを飛ばし、男女の賃金格差、最近、大きな話題となった「コミュニケーション力があると、なぜか損をしてしまう」という女性の問題に移って問題提起の授業提案がされた。

・ジェンダーバイアス問題では、女子力という言葉はあるけれど男子力は？など、無意識のジェンダー認識がまず紹介され、男女の賃金格差、年齢別賃金や勤続年齢別の賃金格差のグラフやデータから、思いつくことを話し合った。

・また、このデータを見た中学生の「先生、なんで女子は賃金が低いの？」という疑問、質問を紹介して、それにどう答えるかをグループで話し合っていた。

・その際、まず、四つの資料（出産・育児後の仕事の変遷、正社員の間に見られる男女の賃金格差の理由、マミートラックの資料、女性に適した職業の調査）を4人のうちに割り当てられたメンバーが集まり意見交換する。それをさらに、最初のグループに戻り、四つ

の資料の分析から得られた結果を報告して、さらに討議をするという「ジグソー方式」での検討を行なっていった。

・この日は、時間の関係で、ワークショップでは、グループに戻っての検討の途中で時間切れになってしまったが、男女の賃金格差の理由の深い分析がこの討議から生まれる可能性を参加の先生方が感じる事が予想される授業提案が展開された。

・最後に、子ども貧困を考えるということで、現在、奥田先生自身がこれはどうなのかと考えている問題が紹介された。一つは、子どもに寝る前絵本の読み聞かせを勧めることは、機会の公正から問題はないのか、ということである。もう一つは、非認知能力の大事さをどう授業のなかでいかしてゆくのか、理論の問題である。これは、まとまった形での授業提案とはなっていないが、現在の奥田先生の問題意識の一端を紹介して、授業提案を終了した。

▼質疑応答

Q: (男女の賃金格差を解消するには) 女性起業家をたくさん増やせば、いいのではないか?

A: それもある。もちろんいろんなアイデアもある。議論になるのがいい。

Q: 生徒が考える体験、問いを立てる体験をしてこなかったから、こういう授業(ジグソーのような授業)をしたのか?

A: 生徒の声がなければ作らなかった。作れなかった。

Q: 段ボール95%がリサイクルからと紹介されたが、のこりの5%は?

A: ある自治体に廃棄してもらっている。

Q: 子ども貧困を考えるの箇所で、寝る前を読み聞かせをすることを公正の観点から問題にしたが、公正の問題にすると、既にやっている人間にとってはどうなのか疑問に感じた。それなら、2分の1成人式をネタにした方がいいのでは?

A: そういう考え方もあるだろう。さらに議論したい。

<新井提案>「アクティブラーニングを取り入れた金融の授業」

・新井は以下のような提案を行なった。

・まず、おさらいとして、現行の学習指導要領、次期の学習指導要領で金融がどのような扱いをされているかを確認した。そこでは、金融の定義からはじまり、銀行の役割、中央銀行の役割、金融政策と幅広く扱われると共に、金融に関する技術革新、パーソナルファイナンス、コーポレートファイナンスまで新しい動向、生活上の課題解決までひろく扱われていること、さらに、フィンテックや仮想通貨、キャッシュレス社会への進行への対応、起業と金融などまで学習項目がひろがっていることが確認された。

・このような広がりをもとにどう理解するのか。それには、「政治・経済」の教科書には必ず掲載されている金融フローの循環図が役立つ。そこから、金融現象を区分けして考えて、ストーリーを考える手順で、一度ですべての金融現象を扱わなくとも良いという姿勢を持つことができる。また、コーポレートファイナンスの領域やパーソナルファイナンスの領域は他教科や総合的な学習の時間で扱うなどの対応を考えるべきとの提案が行なわれた。



・具体的な実践では、昨夏の「経済教室」で発表があった、札幌部会の田丸先生の「わらしべ長者による金融学習が簡単に紹介された。

・また、これも昨年実践された北見北斗での「アベノミクスを体験する」という授業の一部が再現された。これは、まず、教室を貨幣量が違う二つのグループに分けて、品物を落

札させてその価格差の理由を推定させる「ヘリマネ」実験から始まる。その結果を受けて、各種データを提示してアベノミクスの到達点、問題点を考えさせて、これから起こることを推定させるという授業である。

・時間の関係で、データ分析は駆け足となったが、簡単な実験の背景にある理論的背景やデータをもとにした分析など、これからの授業づくりのヒントとなる可能性がある提案である。

・最後に、株式学習ゲームや、経済への三つのトビラなどゲーム教材のいくつかを紹介をして、ゲームを使ったアクティブラーニングへの挑戦も提起して講義を終了した。

▼質疑応答

Q：金利は金融の基本。中学校の教科書でも出てくる。高校なら金融ってどの程度まで教えたらいいか、先生の見解を聞きたい。

A：実は金利は授業では扱っているが、本来の金利に関して言えば半分までしかやっていない。なぜなら、金利の計算は将来に対する予測の問題も絡んでくる。私の実践では、そこまでは扱えていない。現在、東京部会の塙枝里子先生が時間の経済学（アリとキリギリス）として、金利を含めた金融、時間軸を入れた経済の考え方を教える実践をされているので、参考にして見て欲しい。

＜終わりの挨拶＞川瀬雅之先生（札幌市立北翔養護学校校長）

・札幌部会では、色々な教育現場に所属し、目の前の子どもたちに対して学習学びを一緒に取り組んでいるメンバーが集まっている。広い北海道のあちこちの地域の特性を生かしながら実践している。

・奥田先生の授業提起のように、いかに子どもたちの実態を把握し、次の課題を見出していくか。それを次の実践に結びつけていくこれが課題だと思う。また、鍋島先生の指摘のように、試行テストの正答率から、つまづいている部分を把握する。それを辛抱強く、ねばり強く補正してゆくことも必要。新井先生の北見の実践の余韻（いい意味での物足りなさ）を感じながら、これを実践と理論をうまく組み合わせながら、次に繋げていける実践を進めていく必要性を感じる。・資金調達と起業についてもこれからも実践していく必要がある。

・北海道からの授業案の提起などこれからも努力してゆきたい。

4 まとめ

・先生方が交通事情も含め動きにくい時期で、参加者は必ずしも多くはなかったが、内容の濃い、かつアットホームな雰囲気の良い教室となった。主催者の東京証券取引所の金融リテラシー教育の取り組みや開発中の教材の紹介もあり、多くの情報が提供された有意義な教室でもあった。

以上 記録：杉田、中山、整理：新井